

## 献呈の辞

いまは、気候変動、地殻変動あるいは人口変動といった事象で象徴される「変動の時代」である。専修大学も専修大学法学部も、少し意味合いは違うが、まさに「変動」のさなかにある。この時期に、専修大学法学部を長年にわたって支えていただいた佐藤恭三先生を定年退職でお送りすることに、ことのほか強い感慨を覚えるところである。

佐藤先生は、1982年4月に本学に入職されてから、2015年3月末をもって定年退職されるまで、助教授歴6年、教授歴27年の計33年の長きにわたり、本学の学術研究および教育にご尽力され、貢献をされてきた。

佐藤先生は、そもそも戦間期の日英関係史、英国の極東政策あるいはビルマ近代史などの研究に携わってこられたが、この間、とくにイギリスの歴史学者・国際政治学者である F. H. ヒンズリー教授 (Prof. Francis Harry Hinsley) の作品研究の第一人者としてよく知られるところである。同教授の代表的著作である *Power and the Pursuit of Peace: Theory and Practice in the History of Relations between States*, (Cambridge University Press, 1963) は、それまでもっばら国際関係の政策理論に依存しがちであった20世紀の戦争回避政策を批判し、真の平和構築のためには国家権力が互いに覇を競って膠着する歴史的現実を目を向けねばならないと説くものであり、佐藤先生は、この翻訳をとおして新たな平和構築論を探求している。同書の翻訳単行本化は、長い間期待されていたが、『権力と平和の模索—国際関係史の理論と

現実』(勁草書房, 2015年)として結実することとなった。同書は、国際関係史のみならず国際政治学においても大きな意義が認められるものと確信する。

佐藤先生は、本学では主に英語の講義を担当され、本学英語教育の中心的役割を担ってこられた。上記の学術研究が英語教育に十分に生かされてきたことは想像に難くない。このような研究・教育におけるご活躍のほか、学生部次長、図書館委員会委員、教養課程委員会委員、入学試験委員会委員あるいは二部教務委員会委員などを歴任され、学内行政においても多大なる貢献をなされた。謹んで感謝申し上げたい。

知を識り、知を踐ない、学を問う佐藤先生のご発言は、常に大学・大学人の本質を衝くものであり、法学部教授会の意思決定にもおおいに良き影響を与え、ときとしてわれわれの進むべき道を指し示してくれるものであった。そのような厳しさがある反面、そのお人柄は穏やかで、機知に富んだお話の仕方や内容ということもあり、多くの教職員から「恭三先生」あるいは「恭三さん」として親しまれてきた。それゆえ、教員間の調整役として、あるいは「潤滑油」として、佐藤先生の果たしてきた役割は、先生をおいてほかには果たすことができないものであったとあってよい。心から感謝申し上げたい。

さいごに、佐藤先生の本学への全般的なご貢献に感謝申し上げ、また、今後の一層のご活躍を心より祈念して、ここに『専修法学論集第』第123号を謹んで献呈させていただきたい。Leben Sie Wohl!!

2015年3月吉日

専修大学法学部長 白藤博行